

ジョゼフ・E・スティグリッツ著「フリーフォール グローバル経済はどこまで落ちるのか」

徳間書房 2010年2月28日刊を読む

アメリカの長期的競争力とは何か

1. アメリカの非効率的な医療部門は、ほかの先進国の医療部門と比べると、コストは高いのに、平均では成果が見劣りする。場合によっては、アメリカの医療の質は第三世界の国々と同水準にとどまるが、高度医療にかんしては他国を凌駕している。
2. アメリカの教育部門も非効率的で、実際は多くの新興市場国と同水準にとどまるが、やはり高等教育ではアメリカの大学に肩を並べるものはない。
3. アメリカの長期的展望について考えるとき、経済学者はまず次の二点から考えはじめる。わが国の長期的競争力とは何か、そして、どうすればその競争力を手に入れることができるのか？わたしの見るかぎり、アメリカの長期的競争力は高等教育機関と、それらの強みがもたらすテクノロジーの進歩にある。この分野ほど、世界において大きな市場占有率を持つ経済部門はない。アメリカの大学は世界じゅうから最高の才能を引き寄せてきたし、その多くがアメリカにのこって永住する。アメリカの一流大学はどこも利益追求機関ではない。その事実、利益追求機関に信を置くことの誤りを示している。
4. しかし、高等教育だけで、アメリカの経済戦略を全面的に具体化できるわけではない。中産階級向けに高給与の職を生み出す方法を考え出さなければならない。アメリカを支えてきたそういう職が、産業基盤の弱体化とともになくなりつつあるからだ。ドイツなど他の国々は、確固たる見習い制度を基盤として、競争力のある高度技術産業部門 製造部門を生み出してきた。おそらくアメリカもそういう方向で考えていくべきだろう。
5. 危機でパニックを起こしたとき、アメリカは過ちを犯した。アメリカは、これまでどの国も注入したことのないほど多額の資金を自動車部門と金融部門の緊急援助に注ぎ込んだが、その前に、これらの問題が問われるべきだったのだ。

P275 ~ 276

[コメント]

アメリカの強みは、高度医療と高等教育の2つ。では、日本の強みは、と考えるヒントに本書はなる。スティグリッツ先生の問題意識の高さから大いに学び、日本の成長を考えたい。

- 2010年2月6日 林明夫記 -